

飯盛城の支城群

天野 忠幸（天理大学教授）

はじめに

飯盛城周辺は、南北朝時代の四條畷の戦いから、江戸時代前期の大坂夏の陣まで、軍事的要衝として、たびたび軍勢の通り道や合戦の舞台となりました。大阪平野や大阪湾だけでなく、京都盆地まで見渡せる生駒山地北西部という立地に加え、京都から高野山まで河内を南北に縦貫する東高野街道は、軍勢を自由自在に動かせる利点がありました。その上、深野池と新開池という湖が堀の役割を果たし、飯盛城を大軍で取り囲むことができないなど、好条件が重なっていたのです。

また河内北部、つまり淀川左岸にして大和川下流という飯盛城周辺の河内内海世界の特性も考えてみましょう。水害がひとたび起きると大惨事になりますが、平時は重い物資を運搬するのに有利な水上交通網が縦横に広がっていることを意味します。そして、近隣には首都京都と国際貿易都市堺が存在していました。これら大消費地の後背地として、河内北部は重要な意味を持ってきます。京都に本拠地を置く室町幕府は、足利将軍家の御料所として、河内十七箇所や河内八箇所を設定し、将軍に近い寺社に管理を委ねようとしていました。淀川右岸の摂津守護である細川管領家も、こうした巨大荘園を手中にしたいという野望を持っていました。一方、河内守護の畠山管領家は、堺や住吉、天王寺など摂津關郡（現在の大阪市）を虎視眈々と狙っています。

このように有力な武家が三すくみとなり、それぞれの勢力が入り混じる不安定な政治状況の中、淀川と大和川の合流点である大坂には、本願寺教団が御坊を設置し、日本最大の寺内町へと発展していきました。また、内海世界の最奥にある飯盛城も摂津・河内・和泉で最大級の山城へと進化を遂げます。そうした飯盛城の前提には、様々な軍勢が陣取った野崎の存在がありました。飯盛城を築いた木沢長政は、信貴山城も築城し、国境の城から河内・大和の両国に睨みを利かせます。三好長慶が飯盛城に入ると、三箇氏や結城氏、田原氏など周辺の城主たちが結集して仕えました。こうした飯盛城とそれを取り巻く支城群に着目したいと思います。

1. 畠山義就・義豊と野崎城

飯盛・野崎地域がその名を知られるようになったのは、南北朝時代の四條畷の戦いです。正平2年（貞和3年、1347）8月に楠木正成の長男正行が挙兵すると、各地で足利方を破りました。このため、足利尊氏は執事の高師直に出陣を命じます。『醍醐地蔵院日記』貞和4年（1348）正月2日条に「執事立八幡、懸于河内路、進発東条城云々、但令逗留野崎辺云々」とあるように、師直は東高野街道を南下し野崎に陣取ったのでした。その後、飯盛山も占領します。大軍を率いる師直は、わざと多勢の用兵に不利な飯盛山と深野池に挟ま

れた狭隘な野崎に、少数精鋭をもってなる正行を誘い込み、正面と側面から挟み撃ちにして、讃良郡の北四條で討ち取りました。

その後、しばらく飯盛山麓では大きな戦いはありませんでしたが、この地が再び重視されるようになるのが、応仁・文明の乱です。河内では、東軍の畠山政長と西軍の畠山義就が激突しました。特に政長は大和の筒井氏（大和郡山市）、義就は同じく越智氏（高取町）・古市氏（奈良市）・鷹山氏（生駒市）を従えており、多くの軍勢が河内と大和を行き来することになります。文明2年（1470）7月には畠山義就被官の遊佐氏が野崎に陣取り、翌年6月には遊佐五郎が野崎より出撃して、客坊（東大阪市）を落としています。7月には逆に政長方の筒井氏らが河内に討ち入り、義就方の遊佐氏が籠る三箇を攻撃しました。文明5年11月にも筒井氏は野崎を攻めているので、野崎は義就方の一大拠点となっていたようです。

応仁・文明の乱は文明9年（1477）9月に、西軍が形式上降伏する形で終結します。しかし、畠山義就はそれを無視して河内に下向し、実力で占領してしまいました。同月27日、義就は野崎に本陣を置きます。この時、往生院城（東大阪市）や客坊城も義就方の拠点となっているのは、義就が越智氏ら大和衆に支えられていたためでしょう。

その後も、河内奪還を図る政長と義就の戦いは続きますが、文明15年（1483）8月、義就は野崎と犬田城（枚方市）を攻めているので、どこかの段階で、野崎は政長に奪われていたようです。明応2年（1493）に將軍足利義植・畠山政長と義就の子義豊が戦った正覚寺合戦の際に作成された「河内御陣図」（『福智院家文書』）は、それまでの両畠山氏の戦いも盛り込まれていますが、野崎も描かれており、軍事的要衝と広く認識されていたことがうかがえます。

ようやく野崎が「城」と記述されるようになるのは、畠山義豊の時代になってからです。『尋尊大僧正記』明応7年（1498）8月9日条に「河内野崎城被責之、不成事而引退了」とあるのが初見です。この時、義豊は政長の子尚順の守る野崎城を攻めましたが撃退されました。明応8年（1499）正月10日に義豊は野崎城を攻め落としますが、その月末に戦に敗れ自害してしまいました。同年10月4日に、義豊の子義英が畠山尚順の野崎城に攻めますが（『後法興院政家記』）、落とすことはできませんでした。これ以後、野崎が直接戦場となった史料はありません。おそらく、より高所の飯盛城に城郭としての機能が移ったのでしょう。

両畠山氏より重視された野崎でしたが、どのような要害だったのかはわかりません。当初は、慈眼寺に間借りするような形だったのではないのでしょうか。寺院と城郭の構造物はよく似ているからです。往生院城や客坊城もそうした寺社の建造物が利用されたと思われます。またこれらが地域の聖地であり、そこを守護することで地域住民を動員することや、大和との連絡が重視されたようです。

2. 木沢長政と飯盛城の支城群

飯盛城は享禄3年（1530）以前に、木沢長政によって築かれた山城です。木沢氏は元々、

義就流畠山氏の奉行人の家格でしたが、畠山管領家や細川管領家が分裂して争う中で、畠山義堯（義就流）・細川高国（高国流）・細川晴元（澄元流）と渡り歩き、高屋城（羽曳野市）を代々本拠地とする畠山管領家の影響力が小さい河内北部で割拠しました。

長政は享禄4年（1531）から翌年にかけて、畠山義堯や三好元長の飯盛城攻めを細川晴元や一向一揆の援助で耐え抜くと、逆に大和や山城南部に勢力を拡大していきます。そうした中で、天文2年（1533）12月には、信貴山に陣を置き居住するようになりました（『兼右卿記』）。長政は信貴山より、本願寺に敗れた細川晴元に対して、京都か飯盛城に逃れるよう勧めてもいます。また同年には、飯盛城に義堯の弟在氏や父の木沢浮泛を置きました（『蓮成院記録』）。そして、『天文日記』天文5年（1536）6月26日条に「信貴山之上ニ城をこしらへ候て、はや移候」とあるように、長政は信貴山城を本格的に築き居城としています。「和州平群郡信貴山城跡之図」（『大工頭中井家関係資料』）によると、「書付無之かまへ（構）、何れも木沢殿取立之時之古屋敷ニ而御座候」とあるので、後に城主となる松永久秀の時よりも、長政段階方が曲輪は多かったようです。信貴山城が本城で、飯盛城が支城という関係になりますが、畠山在氏は「飯盛御屋形様」と呼ばれますので、飯盛城は特別な支城ということになるかも知れません。

その後も長政は、金剛山地に二上山城（葛城市、太子町）、大和と山城・近江・伊賀の境に笠置城（笠置町）と複数の城郭を整備していきました。新興勢力の長政は、敢えて国境地帯に拠点を置くことで、平野部に拠点を置く既存の勢力との対立をやわらげ、国境地域の土豪らを把握していきます。

また、長政の城郭政策には特徴がありました。飯盛城の山上の御体塚郭には大きな花崗岩の露頭がありますが、このような巨石は磐座として信仰の対象となったため、そうした聖域を城内に取り込んだとされます。また飯盛城の西麓には、慈眼寺があることも忘れてはいけません。信貴山城も中腹の朝護孫子寺に加え、山頂の雄嶽にある露岩の上に、空鉢護法堂が設置されています。二上山は西麓に聖徳太子や推古天皇の墳墓を抱え、山上には葛木二上神社があるなど、祈雨や葛城修験など信仰の山でした。笠置城は、巨石に彫り込まれた摩崖仏の弥勒仏を本尊とする笠置寺に拠っています。長政の山城の選地は、寺社や自然崇拝の聖地を重視していたのです。

木沢長政は天文11年（1542）の太平寺の戦いで討死しますが、飯盛城の畠山在氏や木沢浮泛は翌年まで戦い抜きました。

3. 三好長慶と飯盛城の支城群

飯盛城はその後、交野郡出身と推測される安見宗房が城主となりますが、永禄3年（1560）に三好長慶が入城します。長慶と宗房の戦いでは、安見方は飯盛城から打って出て、大窪（八尾市）や堀溝（寝屋川市）で三好方を迎撃しました。野崎まで攻め込まれた様子はなく、宗房は交渉により飯盛城から堺に退去しています。飯盛城が軍事的に落城した訳ではないのです。

長慶は河内と大和を平定しますが、木沢長政とは異なり、飯盛城を居城とし、信貴山城は重臣の松永久秀に与えました。久秀は多聞山城（奈良市）を築城して居城とするので、信貴山城は飯盛城の支城ではなく、多聞山城の支城となります。

飯盛城の構造は、江戸時代に作成された『河内国飯盛旧城絵図』より、多少ながらもうかがい知ることができます。注目したいのは「三ヶ殿曲輪」です。つまり、深野池の小島に城を構え、船を大量に動員できる領主の三箇頼照サンチョが、長慶に仕え、飯盛城内に屋敷を持ち、一つの曲輪を任されていたのです。そして、頼照は永禄7年（1564）に飯盛城で洗礼を受けた約70名の一人となりました。

そうした河内キリシタンに、岡山（現在の忍ヶ丘）の城主である結城ジョアンやその伯父で後見人の結城弥平次ジョルジ、また結城左衛門尉アンタンや田原レイマンなどがいます。結城氏は將軍直臣の幕府奉公衆でしたが、三好長慶が將軍足利義輝を追放し首都京都を単独で支配するようになると、左衛門尉の父親にして弥平次の伯父である結城忠正が長慶に従うようになります。そうした結城氏の領地は、東高野街道と清滝街道が交わるあたりにありました。この地域には、キリスト教宣教師の史料に「砂の寺内」とあるように、浄土真宗が広がり、町場化が進んでいました。そうした場所に教会を建て、住民に布教していったのです。

また、田原レイマン（礼幡）は、フロイス『日本史』によると天正3年（1575）に主だった河内キリシタンと共に織田信長のもとへ挨拶に出向いたことや、千光寺跡で見つかった天正9年銘のキリシタン墓碑で有名です。レイマンも周辺の領主の動向を踏まえると、長慶に仕え、改宗したと考えられます。田原城は天野川沿いにあり、すぐ東側は現在の生駒市南田原町や俵口町に接しています。つまり河内と大和の国境にあり、その往還を守っていたのです。

こうして見ると、飯盛城の支城として、三箇城は深野池の水路を守り、岡山城は東高野街道と清滝街道に目を光らせ、田原城は大和との交通路を監視するという枠割を担っていたと言えるでしょう。

4. 松永久秀は慈眼寺を焼いたのか

永禄7年（1564）に三好長慶が飯盛城で死去すると、翌年末にはその家臣団は松永久秀方と三好三人衆方に分裂し争うようになりました。そうした戦いの中で、永禄8年（1565）に久秀が慈眼寺を焼いたとされてきました。それは本当でしょうか。

まず、『河内名所図会』「福聚山慈眼寺」によると、「寺説云、永禄八年、松永久秀志貴城に籠りて、近隣動乱の時、佛閣、兵燹に罹て灰燼となる。漸、本尊、實慶の寺記のみ遺れり。」とあります。しかし、永禄8年に久秀がいたのは多聞山城で、戦況も三好三人衆方が押さえる飯盛城を攻める余裕など全くありませんでした。

次いで鐘銘には、「永禄八年、三好之嬖臣松永弾正、弑將軍義輝公襲。此時、弊織田信長公、窺京兆、于是五畿騷怖、七道震驚、罹斯喪乱。我山仏閣僧坊、咸成灰燼、而大士之尊

像、儼然独存、慶長元和之間、有青崑者、洞下之英衲也。」とあります。永禄8年（1565）に將軍義輝を討ったのは、三好義継と松永久秀の子久通であって、既に誤っているのですが、この義輝殺害事件を経て、織田信長が京都に進出し五畿七道で戦争が激しくなり、慈眼寺が焼失したとしています。つまり、信長による戦禍なのです。大坂本願寺合戦の最中の天正2年（1574）7月に三箇城、8月に飯盛下で本願寺方の一揆と織田方が戦っていますので（『細川家文書』）、この時に慈眼寺も焼失したのではないのでしょうか。

そうすると、永禄12年（1569）頃に三好義継が飯盛城より若江城（東大阪市）に居城を移し、飯盛城は廃城になったとされていますが、城郭としての機能はまだ残っており、三箇城と連携していたのかもしれません。

おわりに

飯盛城の前史として、畠山義就・義豊段階の野崎城から、木沢長政段階の信貴山城・二上山城・笠置城との共通性、そして、三好長慶段階の三箇城・岡山城・田原城の役割までを振り返ってきました。

義就・義豊段階の頃は絶対死守すべき唯一無二の拠点でもなく、河内と大和を繋ぐ連絡路の一つに過ぎなかったため、たびたび取ったり、取られたりという戦いが続きました。しかし、長政段階で河内北部の一大拠点へと発展し、難攻不落の要塞化します。ただ長政は河内では守護代遊佐長教との共同統治を志向し、大和への進出を政策の中心にするので、大和での軍事行動が容易な信貴山城を本城としていきます。そして、長慶段階では飯盛城直近の支城の領主が編成されていきます。長慶の視点は長政とは逆に河内へ向けられます。河内北部の水陸の交通路を掌握することが、最重要課題となっていたことがわかってきました。

参考文献

天野忠幸『室町幕府分裂と畿内近国の胎動』（吉川弘文館、2020年）

天野忠幸『三好一族』（中央公論新社、2021年）

天野忠幸「畠山氏の分裂と中河内の武士たち」（『新版八尾市史通史編Ⅰ』2023年）

天野忠幸編『摂津・河内・和泉の戦国史』（法律文化社、2024年）

大東市教育委員会・四條畷市教育委員会編『飯盛城跡総合調査報告書』（2020年）

大東市教育委員会編『三好長慶と大東市の中世』（2022年）

中世学研究会編『城と聖地』（高志書院、2020年）

中西裕樹「木沢長政の城」（『史敏』8、2011年）

三原大史「『明応二年御陣図』からみた中世後期の河内国」（『都市文化研究』23、2021年）